

神のいつくしみの主日

アダム・クジャク

4月3日は神のいつくしみの主日になります。これは神の愛に満ちた寛容さが特に輝き出る復活節に神のいつくしみをほめたたえるため、聖ヨハネ・パウロ2世教皇が定めたものです。教皇ヨハネ・パウロ2世は2000年から、ご復活の主日の次の日曜日（復活節第二主日）を「神のいつくしみの主日」と定め、この主日に神のいつくしみに対する特別の信心を行うよう望まれました。それは信者たちが聖霊の慰めの賜物を豊かに受け、神への愛と隣人への愛を強め、成長させることが出来るためです。この信心によって、信者たちはそれぞれ自分を反省して、罪の赦しを得た後、兄弟姉妹をすぐに赦すよう促されます。

（中央協議会） 聖ヨハネ・パウロ2世がこの主日を制定する根本は、聖ファウスティナの記した日記の神秘的な啓示によるファウスティナの前に現れたイエス・キリスト自身のお望みに応じて、神のいつくしみの主日を祭日とすることになりました。彼女の記した日記には「神のいつくしみの祭日」についてイエスのおっしゃった言葉が下記のように書かれています。「…復活祭後の最初の主日はいつくしみの祭日であるが、いつくしみの行いもなければならぬ。その祭日を荘厳に祝うことによって、また描かれている絵を崇めることによって、わたしのいつくしみが崇められることを求める。」（日記742）

しかし1959年から1978年まで、バチカンから公でファウスティナを教会で崇拝することを禁じられていました。青年の頃からファウスティナの日記を読んでいたカロール・ヴォイティワ（後の聖ヨハネ・パウロ2世）は、第二次世界大戦中、強制労働者としてファウスティナの修道院から1km離れた所で働かされ、合間をぬっては修道院に祈りに行っていました。後に大司教となったカロール・ヴォイティワは1965年にいつくしみの日記、メッセージ、祈りがカトリック教会の信仰に反するか、再調査してほしいと教皇庁に働きかけ、そして彼女の列聖を列聖省に要請しました。その尽力によって1978年6月30日に禁止が解け、認可されました。その年の10月16日にカロール・ヴォイティワ大司教は教皇に選ばれ、1980年に「いつくしみ深い神」の回勅を書かれました。その後1993年4月18日にファウスティナ・コバルスカは列福、2000年4月30日に列聖されました。この二人のなんと不思議な神の計画、神へのつながり、すばらしい神のいつくしみの導きでしょうか。ヨハネ・パウロ2世が教皇として遣わされ働きかけがなければ、全世界に広まらなかったのではないのでしょうか。そして今年を教皇フランシスコが「いつくしみの特別聖年」となさいました。光栄なことに私たちの戸部教会は9月12日から9月25日まで

で、聖ヨハネ・パウロ 2 世と聖ファウスティナ・コバルスカの聖遺物を与り、
顕示することになりました。このことによって、より皆がはかり知れない神の
いつくしみの神秘を礼拝し、靈的絆 が強くなることを願います。この期間に 9
月 19 日（月）は第三地区の合同イベントとして賛美と感謝のミサがあります。
9 月 25 日（日）の最終日はバチカン大使ジョゼフ・チェノットゥ大司教様 が
いらしてミサをあげられます。まだ詳細は決めておりませんが、皆さまのご協
力がなくてはなりません。どうぞ祈りのうちに一人ひとりのお力を貸してくだ
さい。